ホールとアーティストをつなぐ 地域創造「音活」（公共ホール音楽活性化事業）

（財）地域創造で実施している、「公共ホール音楽活性化事業（＝音活）」をご存知だろうか。この事業は、コンサートやアウトリーチに関わる人々の企画制作力を育成することで、より多くの人に生の音楽の楽しさを届けるための基盤作りだ。登録アーティストが数日間地域に滞在し、地域の公共ホールと共同企画により「コンサート」と様々な「アクティビティ」（地域交流プログラム）を行っている。今年度の登録アーティストは、全国公募のオーディションにより選ばれた、様々な楽器の8組。そのうちピアノの2組が、ピティナ会員の今野尚美先生＆白水芳枝先生だ。そこで今回、地域創造のコーディネーターである小澤櫻作氏をまじえて、今回の活動についてお話を伺った。（文・構成：霜鳥美和）

ハイレベルなオーディション

福田　今回の登録アーティストの募集に、どのくらいの応募があったのでしょうか？

小澤　過去11年で最高の競争率でした。ジャズや邦楽も含め、全体で140組を越え、中でもピアニストと声楽家は多数でした。年々オーディションのレベルは高くなっていると思います。

福田　登録アーティストのお2組は、どのような思いで、この音活に応募されたのですか？

今野　結婚、出産とかいろいろしているうちに、すっかり忘れてしまっていたのですが、10年前にもこのオーディションを受けていたんです（笑）。当時ロンドンから帰国したばかりで、初めて住む東京で、何を足がかりに生きていけばよいかわからなくて…。ある日雑誌を見て「あれ、これ、受けたことあるわ」と思い出して、自分達がアーティストとして活動するということにも興味がありましたし、ホールで演奏会をするために、公共の場でまずプロモーションという演奏をしていくという活動にもとても興味がありました。地域創造の活動に関われて、とてもよかったと思っています。

福田　登録アーティストの採用の観点というのは、演奏の質などいろいろあると思うんですけれど、どういった評価基準ですか？

小澤　指揮者、作曲家、演奏家、プロデューサーなど審査員7名のそれぞれの視点で見ていただいています。よく「しゃべれるアーティストが欲しいんですよね？」と言われるのですが、まずは「その音楽で伝えたいという意識があるか、気持ちが表れているか」というところですね。「本物」を子ども達、地域の方々に届けたいというのがあるので、やはり演奏がメインにはなります。

白水　オーディションを受けるにあたり、「演奏はもちろん、その演奏と話のつなぎもきちんとした上で、20分間、自分達を出して下さい」といわれました。すごい審査員の方の前でのこの20分間は、「自分達がこれから演奏家としてどんなことをしたいか」という、完全にプレゼンテーションですよね。台本を作って、「ここで藤井が話す、ここで白水が話す」と青と赤で書き出し、2人の間合いや歩き方まで考え、何分かかったか何度も計って準備をしました。

和歌山&富田林での音活

福田　ドゥオールさんは、来月に和歌山で音活をされますが、ホールの方やコーディネーターとの打合せは、進んでいますか？

藤井　僕たちは、どなたか顔もわからないまま和歌山のホールの方よりご指名をいただきまして、初顔合わせは、関西に帰省した8月になってんなの募集してる」と。10年前もきっと同じ事を考えていたのでしょうね。ロンドン留学中から教会や病院や美術館など、コンサートホール以外の場所で聴衆とコミュニケーションをとりながら弾かせていただくことは、ごく自然なことでした。今回はご縁をいただき、このような活動の仕組みや狙いが整理され、改めて理解することができたように思います。

藤井　僕たちの場合は、ドイツ留学から帰国する前から、この「音活アーティスト」を結構狙っていたんです（笑）。日本では、こういう活動があるんだと、インターネットで知りまして。「地域創造」という名称といい、まさに僕たちのイメージする地域活動だと思いました。

白水　ドイツ滞在中も、コンサートホールだけでなく、老人ホームやロータリークラブのイベントなどで演奏する機会があったのですが、その中で、お客さんやいろいろな人との関わりなど、全部をひっくるめて「演奏会」だと思うようになりました。ホールから出て行っ

「音活」（公共ホール音楽活性化事業）とは

財団法人地域創造が主催する事業で、地域においてクラシック音楽を身近なものとするため、オーディションで選考された新進演奏家を公共ホールに派遣し、地域の公共ホールと共同企画により「コンサート」と様々な「アクティビティ」（地域交流プログラム）を行っている。昨年度10年目の段階で、実施したホール数は200件。また、企画から公演に至る過程において、企画・制作能力を高めるための研修機会を提供することで、地域の公共ホールスタッフの育成、地域文化の活性化を図っている。

- **公共ホール**　その地域ならではのコンサート、アクティビティの企画制作を担当
- **コーディネーター**　付加価値をつけながら、ホール＝アーティスト間の調整を行う
- **アーティスト**　ホールの要望や地域事情をもとに、アーティストならではの企画を提案

登録アーティスト応募から公演実施まで

①登録アーティスト募集
2年に一回募集。MDなどの音源提出。ソリスト部門・アンサンブル部門あり。応募対象は、登録初年度4月1日時点で20歳以上35歳以下（アンサンブル部門は平均年齢35歳以下。ただし、満20歳以上37歳以下で構成されていること）。

②オーディション（本審査）
予備審査に通過した20組程が、ライブ演奏による本審査に進む。審査員は指揮者、作曲家、演奏家、プロデューサーなど。演奏およびトークの後、質疑応答あり。7～10組を選考する。

③アーティスト研修会
合格者の登録に際して、研修会を実施。詳細な事業説明のほか、地域コミュニティ - との関わり方、多様な客層に対する効果的なアプローチの仕方などを学ぶ。

④プレゼンテーション
音活事業を実施するホール（約20団体）などに対して、アーティストの演奏と、音楽観を伝える機会。演奏＋トークの20分間のプレゼンテーションを行う。

⑤派遣先＆コーディネーターの決定
プレゼンテーションをもとに、ホール担当者が、招聘したいアーティストを指名。ホールとアーティストで実施日を決定、企画趣旨も考慮の上コーディネーターも決定する。

⑥コーディネーター等との企画打合せ
その地域ならではのオリジナルの企画作りを目指し、コーディネーターのサポートのもと、アーティストとホールがアイデアを出し合い、共同で企画を考えていく。

⑦公演（コンサート＆アクティビティ）
コーディネーターのサポートのもと、公共ホールでのコンサート、および、アクティビティ（アウトリーチコンサート、ミニコンサート、ワークショップなどの地域交流プログラム））を2日程度にわたり実施する。

音活レポート①大阪

■ 日程：2008年9月19日（金）～21日（日）　■ 場所：大阪府富田林市　■ アーティスト：今野尚美
■ ホール担当者：辻野文崇氏（すばるホール事業部）
■ コーディネーター：能祖将夫氏（北九州芸術劇場プロデューサー・桜美林大学准教授）

▲9月20日（土）ピアノ・ミニコンサート「親子のための星空音楽会」。プラネタリウムの星空と絵本を眺めながら星や月にまつわる曲を演奏したり、宇宙の映像に即興でピアノ演奏をつけた演奏会。

▲9月20日（土）ピアノクリニック「ピアニストのエッセンス」。小学生高学年4人と高校生1人が受講。大きなピアノと大きなホールの響きを使った贅沢な環境のレッスンでした。

▲9月21日（日）ピアノ・リサイタル「ピアノ・ルネサンス」。バロックから近現代まで音楽の歴史をたどりながら、楽器の歴史や作曲家のお話もまじえて、演奏。

からでした。

白水　お会いしてホールの方が、「プレゼン当日など、僕たちなんかに話をしてくれるとは思わなかった。」「まさか会いに来て下さると思わなかった」とかおっしゃっていました（笑）。

藤井　今回は、自分達がやりたいことをまず推してみた方が、ホールの方に伝わるだろうと考えました。2台ピアノに加え、（ホール側の許可が得難い）内部奏法を披露したい僕たちにとって、「とにかく2人が演奏してくれるのであれば、何でも歓迎です。何でもこちらで用意しますから。」というホール側のスタンスは、ありがたかったです。打合せをしていく中で、ホールの方は大変意欲的に対応くださり、和歌山市長も視察に来られるということで、頑張らなくては、と。ピティナの和歌山支部の方々もご協力くださっているようです。

福田　今野先生は、大阪の富田林市で9月に初回を終えられましたが、いかがでしたか？

今野　まず、ホール担当者の方が大変ピアノが好きな方で、その熱い思いにお応えしたくて、最大限の可能性を考えて努力したいと思いました。

そして、「演劇」がご専門のコーディネーターさんのアイデアが加わり、俯瞰的にプロデュースして下さって大変ありがたかったです。例えば、絵本を朗読していただき、私がそれに即興で音楽をつけたり、詩と音楽のコラボレーションをしたり。また、アシスタントの方がトランペットができるということで、朗読の中の効果音としてトランペットを鳴らしてもらったり。そんな感じでみんなを巻き込んで、本番直前まで「ああでもない、こうでもない…」と練って、携わって下さる方々と聴いて下さるお客様との一期一会の音楽のひとときを大切に、様々な要素が融合した楽しいステージを作ることができました。

コーディネーターと企画制作力

小澤　音活の面白いところは、他人の価値観が加わってくるところなんです。ホールの人は、企画の入り口にいて、コーディネーターに相談する。するとアーティストが、どんどん膨らましていく。アーティストもここの入り口を持っていなかったので、「こんな楽しい世界があったんだ」と。そしてまた次の街へ行ったら、違う入り口から入り、地元ホールの方々と価値観を共有しながら、ステップアップしていくわけです。

福田　こうやって公共ホールの担当者を育てるというのも、地域創造の役割の1つですよね。

小澤　そうですね、音活は「自ら考えて自ら作ろう」というところから始まった事業で、ホールの方には、「企画で伝える」というのが、私達が導きたい方向なのです。音活が始まってから、ホールの方がアーティストとまずコミュニケーションをとる、ということに取組むホールさんが増えてきました。ホールの方って、自主事業をやっていても出演者と一言も交さないで終わるという事が8～9割なんです。マネージャーがストップしてしまうこともあるようで。これでは、カタログ販売みたいなものになってしまいますよね。ホール担当者、間に入っている人、アーティストが、それぞれコミュニケーションを怠ってしまっては、やはりよい音楽活動はできないだろうと思います。

福田　ホールの方が一番その地元のお客さんのことを知ってますしね。

小澤　具体的なプログラムを考えることは、クラシックの専門家ではない限り、非常に厳しいと思いますが、大切なのは、この地域がどういう地域なのか、その地域のために何を目的にやっていきたいのか、その目的を達成するためにはどういった場所で行うのがより効果的なのかなど、まずは、ホールの担当者が考え、アーティストに伝えていくことです。つまり、その企画の基礎となる環境を「デザイン」するということですね。そして、アーティストは、その「デザイン」を受けて、どういう曲目をどういう順番でやっていくのか、トークを入れる部分、入れない部分、テーマなど。観客とコミュニケーションを深めて行くための「プロセス」を考えていきます。公共のホールの方々に、企画する人間として学んでもらいたいのは、こういった「デザイン」と「プロセス」をしっかり理解していただいて、積極的にコミュニケーションをとっていただくことなのです。

福田　コーディネーター的な役割というのは、本来はどこが持っておくべきなんでしょう？

小澤　ある意味、ホール側でもアーティスト側でも、両者で必要な能力だと考えています。コーディネーターは、アーティストよりもホールよりも歴史が浅く、まだまだ人材がいないという段階ですが、ホールの方々が、地域の人たちとコミュニケーションを取るように、アーティストとコミュニケーションを取るようになって企画制作に活かせるようになったとき、コーディネーターというのは必要でなくなるのではないかなと思っています。

地元の指導者との連携

小澤　この音活事業をずっとやっていて、限界を感じるところがあるんです。というのは、うちでホールに派遣する登録アーティスト達というのは、旅人でしかないんですね。いろんな町に来ていろんな人たちと出会ってコミュニケーションを取って音楽を〝伝えて〟いくわけですが、その場限りなんです。次の街に行かなくてはいけない。結局、その地域の人たちに音楽を〝伝え続けて〟いくというのは、やっぱり地元にいるアーティストだということ。特に、地域の子供たちであれば、やっぱり指導者というのが、とても重要な役割を担っていると思うんですよね。

福田　その地域に住んでいるアーティストや指導者のような役割を、登録アーティストに求められることもあるわけですね。

小澤　はい、それが一番辛いんです。音楽はやっぱり継続的な技術習得の積み重ねですからね。旅人であれば、点でしかないのに、その点をどれだけつなげても、やっぱり地元の先生にはかなわない…。登録アーティストにアクティビティの1つとして演奏クリニックなどを企画する際にも、「技術は教えません。楽しみとか楽しみ方というのを伝えたいと思います。」というスタンスにしているんです。旅人だから出来ることと、住んでいるから出来ることというのは明らかに違いますから、その役割分担、連携ができたらよいと思いますね。

今野　みんなのチームワークなんですよね。

福田　今後の音活も、どうぞがんばってください。

音活レポート②和歌山

■ 日程：2008年12月19日（金）～21日（日）　■ 場所：和歌山県和歌山市　■ アーティスト：ドゥオール（藤井隆史＆白水芳枝）
■ ホール担当者：谷奥雅伸氏、川島博文氏（和歌山市民会館）　■ コーディネーター：楠瀬寿賀子氏（津田ホール）

12月19日（金）和歌山市立城北小学校でのアウトリーチ：内部奏法を用いた現代作品（G.クラム：白鳥座ベータ星）を演奏する前に、ピアノという楽器の仕組み、内部奏法とはどのようなことかを、ピアノの周りに集まってもらい説明しました。

12月19日（金）和歌山県盲学校でのアウトリーチ：音を肌で波動として感じ、今まで経験したことや感情と重ねて音楽を聴くという意見に、はっとさせられました。「聴いているだけで二人がとても仲がよいのがよくわかる！」なんてコメントも。

12月21日（日）：「ドゥオール X' mas Special Concert 2008」：作曲家の国、時代などを、ソロ、内部奏法、4手連弾、2台ピアノというピアノ最大限の可能性で紡ぎながら、照明による演出も加え、音楽の大旅行をして頂きました。